

京鹿子

京鹿子 (Karakusa) 是一种传统的日本图案，由鹿子 (Karakusa) 和鹿子 (Karakusa) 组成。它是一种由鹿子 (Karakusa) 和鹿子 (Karakusa) 组成的传统日本图案。

9月号

豊 田 都 峰
漣 響 集 その十三

青 梅 雨 の ち ら ば り ぶ り に 南 行 す
荒 梅 雨 の 底 の ひ と 日 は な に も せ ず
放 課 後 の 森 の 木 洩 れ の 甲 虫
波 の 寄 る た び ご と 青 夜 溜 む る 島
青 夜 な る 水 軍 島 の 船 溜



近飛鳥行 八句

雲の峰国見の丘に佇ちもして
皇子眠る峰より夏の雲涌き立つ
古墳群つなぐ径なりギス高音
万緑の当麻双塔相呼び
青葉なる風一身に信心す
万緑の金剛一方位占む
千早城址指呼に灼熱なる丘陵
正成の砦址なる丘万緑

大暑 丸山佳子

蝉しぐれ水は水づれ木は木づれ
あの雲の答は一つ豪雷す
ハロハロー笑みを交はして冷房館に
登山口に赤いポストにもさようなら
何見ても喰みても大暑おかげさま



秀華採集

信じるといふ無防備や棒振虫

鳥羽夕摩

棒振虫は子子。無心に揺れ泳ぐ姿と上中の概念とをうまく組み合わせた点を評価したい。組み合わせに詩があるのだから、いい季語などを捜し出して挑戦してみてほしい。

水音のしてより揃ふ薄暑の歩

井尻妙子

十葉の咲きそろふ日よ夫忌日

森道子

前句の省略ぶりがよく、薄暑を救う水音がほほえましい。後句の「十葉」の持ち出し方がよい。身のまわりに句材はいくらでもある。

鈴鹿 仁

十七文字

落日の彩を色とし鳳仙花

涼しさは十七文字の句碑辺り

青水無月をしへらるもの風と聴く

夏つばめ南恋せば灯のうるみ

歳月は風の如くに青田波

近 詠

和田 照海

海開き

海開きももひろ千尋まで祓ふ

綿津見の渦も祓ひて海開き

祓はれて渚百選海開き

赤禪加はり島の海開き

大袈裟に四肢の屈伸海開き



神麓集

林 日圓

王女とて桓武の生母渡り鳥
半島より血の半分を秋の鳥
続日本紀武寧の血すじ思ひ草
日韓のワールドカツプ曼珠沙華
くだらとのゆかりは遙か藤袴

更衣 北村 香朗

手術せし予後のきずあと更衣
見覚えの柄なつかしき更衣
更衣シャツに好悪のありにけり
いつの間にか今寿を過ぎぬ更衣
いま一つ齢にちよいとサンダラス

棒振虫 藤岡紫水

松蟬や窓に暮れゆく山一つ
山梔子の白の残像ひとりの夜
振花の影は一筋素直なる
日もすがら薄暮のいろに棒振虫
水張つて山の逆立つ代田かな

松田 都青

祝電が讀まれぬままに五月果つ
百憂の中一喜あり夏落葉
呼ぶごとく呼ばれるごとく梅雨に入る
麦秋や火柱立てて時が行く

服部 郁史

ゆかた着る一番星は娘にゆずり
鱧切りの包丁を研ぐうしろ肩
彝描きし裸婦や大地は麦熟る
帰る燕熱きわが血は大陸系
蟬しぐれまとふ大きな悔ありし

船越 美喜

炎天を来てしばらくのまくらがり
生も死もさだめアカシヤ花こぼす
竹夫人亡き母のこと夢に見て
明日の晴れ約して居りし大夕焼
落し文拾ひしまゝに解かざりし



明け易し覚めよ覚めよと母鴉
 背後より受けしは一番燕なり
 川よりも早き燕河を越ゆ
 浜木綿の絢爛として夏を呼ぶ
 蝉声の一つ鳴き足す夕餉時

高木 智

秋曉にめざむ列車の連結音
 秋のこゑ竹百幹に風を得て
 かけがへなき死も数のうち秋出水
 いつの間に傘壽いつまで穴惑ひ
 皿二枚洗ひ夜長のはじまりぬ

旦 夕 竹貫 示 虹

青菜の皿に菖蒲の青一片
 甘さ節制それでも今日は柏餅
 「卒寿記念展」版画の緋鯉遊泳す
 万緑を貫ぬく列車ガタゴトン
 真つ向に橋立全景風光る

青一片 丹生をだまき

悠久の風はまみどり曾孫生る
 夏草やいよよ一途といふ余生
 みどり雨この身慰む夜もありし
 誕生日穏やかに暮れ豌豆飯
 くくり猿庚申さまの梅雨灯り

悠人 誕生 北川 孝子

黒南風の岬に海向く鎮魂碑
 海南風や終着駅に過疎すすむ
 梅雨闇の密度濃くせる信号燈
 梅雨さ中意に反し試歩とどこほる
 療法士に腕とられて試歩青葉道

山田をがたま

断崖の百合の絶叫日本海
 無垢といふ激しさにあり百合の花
 百合の香にむせび妥協はせぬつもり
 白百合の闇にうかうか告白す
 人肌より少し冷たい百合の花

百合 柴田 朱美



神麓集

夕立ち 伊藤 希眸
 鳶去る塔より夕立ちくる気配
 夕立ち来る母と子離ればなれかな
 手鏡に夕立ちの眉目戦ぎけり
 都心おちこち戯れのやう夕立ち
 各も知らぬ草々濡らし夕立ち去る

青葡萄

丸井 巴水

退屈な胴をくねらせ蛇動く
 足跡は烏天狗か岩魚釣る
 住み慣れて氷室の里の杉すずし
 船宿の鯨のひらきの骨身削ぐ
 青葡萄すでになみだの種はらむ

旅ごころ

川崎光一郎

薰風のさわさわ誘ふ旅ごころ
 我を喚ぶ閻魔の声か青葉木菟
 新樹光シヨートパンツの娘の眩し
 紅ひきて言葉つれなき蛇莓
 青しぐれ地蔵の赤き涎掛

—春から夏へ— 小堀 寛
 皿まはし皿止まりをり春の虹
 たけの子の眠るが如く大原野
 種牛の鼻差し入れる五月闇
 C A F É 工場跡事務所青嵐
 大クレイン小人の動く夏の雲





京鹿子集

豊田都峰選

春月やこの世はみ出る紐琴

京都 鳥羽 夕摩

フルートの高音早瀬へ花吹雪

十薬の咲きそろふ日よ夫忌日

山藤は別れに振りし領巾ならん

山裾の闇かさなりて蛭かな

信じるといふ無防備や棒振虫

紅牡丹名園長の退官日

江戸 伊吹 之博

水音のしてより揃ふ薄暑の歩

井尻 妙子

凌霄花我が居を見つけ洋風館

汗飛ばしシヤッターこじ開け子の帰還

菖蒲苑山ふところの花の寺

澁川 東 秋茄子

夏草引く空想の部屋抜け出して

デジカメで麦秋を一人占めの時

明易の手もと三色ボールペン

八木 森 道子

山寺のそこだけ明るく九輪草

吐家町は水のにほひや夏つばき

そば談義こだはり店に花みづき